

地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題 ——ナラティブ・アプローチの視点から——

加藤 謙介

The significance and difficulties associated with pet animals among elderly residents in need of care
—— From the perspective of narrative approach ——

Kensuke KATO

Abstract

In this study, the relationship between pet animals and elderly residents in need of care was examined using a narrative approach. Semi-structured interviews were conducted with seven elderly residents of Nobeoka-city, Miyazaki, and with the social workers assigned to them. The author enquired about the relationship between the elderly individuals and their pets and focused on the benefits or difficulties associated with the animals in daily life. The analysis of narratives focused not only on the narrative content, but also on the manner in which the stories were narrated. The narratives fell into two general categories: (1) narratives including attachment and emotional bonding with the pet, based on a “model story” about the pet, and (2) narratives of the individuals own life story structured by their relationship with their pets. It is suggested that relationships with pet animals may contribute to the process of reconstructing the life story of elderly individuals.

Key words : elderly residents in need of care, pets, narrative approach

キーワード : 要支援・要介護高齢者, ペット飼育, ナラティブ・アプローチ
2010.11.17 受理

問題

1. 高齢者の地域福祉とペット飼育

日本が高齢社会を迎えたといわれて久しい。介護保険制度における要介護者又は要支援者と認定された者（要介護者等）の人口は、2007年度末で437.8万人と報告されており（内閣府 2010）、高齢者ケアは喫緊の社会問題となっている。

高齢者ケアのあり方は、近年、施設ケアから地域福祉へと移行が進んでいる。地域福祉においては、特に社会資源の開発やそのネットワークングが重要であるとされている（宮城 2008）。また、コミュニティソーシャルワ

ークと呼ばれる実践にも注目が集まり、地域内でのソーシャルサポートネットワーク作りが重要視されるようになってきている（福田 2007）。介護保険法の施行以後、地域包括支援センターなど、高齢者の地域での生活を支える制度が整えられ、地域内での様々な資源を活用しながら、高齢者がより良い生活を実現するためのサポートのあり方が探られている。

こうした中、高齢者の心身の健康に良い影響をもたらすものの1つとして、「ペット」をはじめとする動物との関係に注目が集まっている。研究は、欧米を中心に重ねられており、古くはLevinson（1969）が、愛情と無条件の承認を提供してくれる存在としてのペットについ

て論じている。

特に地域で生活する高齢者とペットとの関係について、海外の調査研究では、ペット飼育が、高齢者に対して、生理的・心理的・社会的な効果をもたらすことが指摘されている（安藤 2003; Baun, Johnson, & McCabe=2007; Hart=1997）。例えば、生理的な効果としては、動物の世話をきっかけにした様々な活動の提供、通院回数の減少などが見いだされている。心理的効果としては、孤独感や不安の減少、幸福感・生活満足度・士気（やる気）の向上、ストレス緩衝効果などが挙げられる。そして、社会的効果としては、ペットが他者との関係の「触媒」になる、社会的ネットワークが広がるなどの知見が得られている。

しかし、国内では、地域で生活する高齢者とペットとの関係に関する調査研究は多くはない（安藤 2003）。研究例としては、都市部と地方のペット飼育状況を比較した調査（安藤・古谷野・児玉ら1997）、ペットとの情緒的交流と精神的健康との関連に関する調査（安藤 2008）などがある。

その一方、高齢者にとってペット飼育は、時に負担をもたらすことも指摘されている。主な問題として、衛生管理の難しさ、しつけの不行き届きによる事故、外出時の不便、住環境の問題、経済的負担、動物・飼い主の病気・死亡をめぐる不安などが指摘されている（山口 1999; 柴内 1999）。しかし、高齢者のペット飼育に関する問題点については、国内では、まとまった研究がほとんどなされていない。

地域で生活する要支援・要介護高齢者にとって、ペット飼育は様々なメリットをもたらす可能性があるが、同時に、様々な課題も存在すると考えられる。高齢者とペットとの関係を福祉の文脈の中に位置づけ、高齢者ケアのための社会資源としてのペットの可能性について考えることができれば、より良い地域福祉の方途を見出すことができると言えるだろう。

2. ナラティブ・アプローチ

高齢者ケアの社会資源の1つとしてペット飼育を位置づけようとするならば、飼育に関わる高齢者自身によるペットへの意味づけを検討する必要がある。高齢者自身の具体的な経験とその意味づけに関わる問題には、「当事者の語り」を重視したナラティブ・アプローチが有効だと考えられる。

ナラティブ・アプローチとは、「ナラティブという形式を手がかりにしてなんらかの現実接近していく方法」として定義されている（野口 2010a: 18）。ここでいう

「ナラティブ」は、「広義の言語によって語る行為と語られたもの」の両方を含意する用語である（やまだ 2006: 437）。ナラティブへの関心の高まりは、哲学・思想の諸領域から影響を受け、質的研究の進展と相即しながら、「ナラティブ・ターン（物語的展開）」とも呼べる認識論・方法論の変革をもたらしている（やまだ 2006: 436）。

ナラティブ・アプローチの特徴について、野口（2010b）は、単にナラティブを分析対象とするのが目的ではなく、ナラティブという概念を手がかりに何らかの現象に迫ることが要点だとしている（野口 2010b: ii-iii）。分析対象としての「語り」「物語」については、既に、ライフストーリー研究・文芸批評・言説分析などの分野で知見が重ねられている。それら従来のアプローチとは異なり、特に、「当事者の語り」の意味と形式を重視しながら、「いまだ語られない物語」に着目していくのが、ナラティブ・アプローチの特色であるとされている。

ナラティブ・アプローチが「当事者の語り」を重視することについて、付言する必要があるだろう。「語りを重視したアプローチ」の必要性は、従来の福祉分野においても繰り返し言われてきたものである。なぜ、改めて、「当事者の語り」に着目することを強調しなければならないのか。これについて、木原（2010）は、制度の下で聞き取られる語りが、しばしば、語り手ではなく、援助者をはじめとする聞き手の側が予め持っているゴールや方向性・答えによって形作られてしまうことがあると指摘している（木原 2010: 161-162）。また、野口（2010c）は、援助者の持つ専門的判断の理論的枠組み自体が、特定の語りだけを選択的に聴いてしまい、それ以外の語りを無視してしまう事態が生じると述べている（野口 2010c: 264-265）。「当事者自身の語り」を聴くことは、「いまだ語られていない物語」に接近するアプローチである（野口 2010c: 265-266）。この意味で、「当事者の語りを重視する」ことを、改めて強調する必要があると言える。

高齢者ケアの分野でも、例えば、施設高齢者の生きがい（鶴若・岡安 2003）や、ソーシャルワークに繋がらない利用者への支援（荒井 2008）等の研究・実践事例において、語りを通じた知見の蓄積は進められている。しかし、要支援・要介護高齢者のペット飼育をめぐる語りについては、ほとんど検討されていない。

要支援・要介護高齢者のペット飼育については、これまで、国内での研究報告があまりなされておらず、福祉領域でもあまり積極的に取り上げられることがなかった問題である。これは、この問題が、「いまだ語られていない物語」であることを示唆している。改めて、当事者の語りを聴き取る必要があると言えるだろう。

3. 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、地域に住む要支援・要介護高齢者を対象に、ペット飼育をめぐる語りを検討した。具体的には、高齢者及び担当の福祉従事者を対象にインタビュー調査を実施し、ペット飼育に関わる高齢者自身の語りの特徴を検討した。その上で、高齢者のペット飼育に関わる課題・展望について、考察を試みた。

方法

2009年7月・8月に、宮崎県延岡市T地区に居住する介護保険サービスの利用者、及び、ケアを担当する地域包括支援センター（以下、包括）・居宅介護支援事業所（以下、居宅）職員に対して半構造化面接を実施した。

1. 対象者

1) 利用者 T地区包括・居宅の提供するサービスを利用するペット飼育者の中から、職員に選定を依頼し、本調査に協力が得られた7名（男性1・女性6、平均年齢78.9歳）を対象とした。

2) 職員 T地区包括職員3名・居宅職員4名を対象とした。

2. 調査手続き

1) 利用者 面接は、利用者の自宅で実施した。面接に際して、まず、本調査の主旨を文書で説明をした後、書面にて調査協力の承諾を得た。

利用者7名のうち、面接に際して家族が同席したのは3名、飼育しているペットが同席したのは6名であった。また、6名に対しては、九州保健福祉大学社会福祉学部在籍する学生1名も同席し、聞き取りを行った。

質問項目として、大きく次の3点を設けた。第1に、対象者自身に関する事柄として、年齢、同居家族の有無と構成、日常生活のリズム、既往症等を尋ねた。

第2に、現在飼育しているペットに関する事柄として、以下の質問を設けた。まず、ペットの品種・飼育年数・飼育するようになったきっかけ等、ペットに関する基本事項を尋ねた。その上で、ペットとの関係について利用者自身がどのように意味づけているかを問うために、日常生活における利用者とペットとの関わり方、ペットから得られているもの、ペット飼育で生じた変化、一番の「思い出」、自分にとってのペットの位置づけ等を尋ねた。

これらを踏まえて、現在、ペットを飼育する上で利用者が直面する問題点・心配事について質問した。具体的には、住環境の問題、近隣トラブルの有無、衛生管理に

かかるコスト、しつけの問題、エサ代・医療費等の経済的問題、外出時の不便、飼育上の心理的不安等を質問する項目を設けた。さらに、それらの問題に対して、利用者自身はどのような対処方法を持っているか、また、誰かに相談することがあるか等を尋ねた。

第3に、以前飼育していたペットについて、第2の項目と同じ質問を行った。

聞き取りは、利用者に対して質問項目のリストを提示しながら行ったが、話の流れに応じて、適宜質問の順番を入れ替えた。また、本人が答えたくない事柄については、無理に話をしなくてもよいことを事前に伝えるとともに、インタビュー中も十分に注意した。聞き取り時間は利用者の疲労に配慮して30分程度に設定していたが、利用者のペースにあわせた結果、約1時間30分～2時間となった。

2) 職員 T地区包括・居宅事務所にて聞き取りを実施した。質問項目としては、大きく次の2点を設けた。

第1に、T地区の地域性や、サービス利用者の全体的特徴など、利用者をめぐる諸状況について質問した。

第2に、担当している利用者のペット飼育に関して、次の事柄を尋ねた。まず、担当利用者のペット飼育の現状と、飼育者の傾向について質問した。次に、ペット飼育をめぐる利用者に生じていると考えられるメリット・デメリットについて尋ねた。また、トラブルとなった事例の有無とその対処についても聞き取った。最後に、相談業務の中で、利用者のペット飼育をどのように位置づけているのかを尋ねた。

聞き取り時間は、約30分～1時間30分であった。

3. 分析方法

本調査では、利用者の心理的負担を軽減するため録音は行なわず、聞き取り時のメモをもとに、可能な限り、会話のやりとりの逐語記録を作成した。その上で、利用者らの語りを個別に検討し、7者に共通する語りと、それぞれに固有の語りを抽出した。

職員への聞き取り結果は、T地区利用者のペット飼育の現状、ケア業務におけるペット飼育の位置づけ、トラブルとその対応、の3点に整理した。

結果

1. 利用者への聞き取り結果

利用者への聞き取りは、概ね和やかな雰囲気の中で行われた。以下では、インタビュー結果を踏まえ、1) ペット飼育をめぐる状況、2) 利用者共通の語り、3)

利用者それぞれに固有の語り、の3点をまとめた。なお、利用者の語りを直接引用した箇所は斜体字で表記した。また、筆者が前後の文脈から内容を補足した部分は、引用文中の丸括弧内に記した。

1) ペット飼育をめぐる状況 7名の利用者に関して、年齢・性別・介護認定・飼育しているペットの品種(頭数)・同居家族について、以下のように整理した(表1)。

表1 利用者のペット飼育をめぐる状況

仮名	年齢	性別	介護認定	飼育している ペットの品種(頭数)	同居 家族
A	83	男	?	犬(1)	妻・娘
B	73	女	要支援2	猫(1)	なし
C	62	女	要支援2	猫(1)	夫
D	81	女	自立	猫(7: 内猫3・外猫3+1)	姉
E	79	女	要支援1	猫(1)	なし
F	93	女	要介護2	犬(1)	義理の 娘
G	81	女	要介護1	犬(1)	娘

利用者が現在飼育しているペットとして、犬(3件、うち独居・高齢世帯なし)、猫(4件、うち独居2件・高齢世帯1件)が挙げられた。7名全員に過去のペット飼育歴があった。ペットの日常の世話について、同居家族がある場合、犬の散歩や、シャンプー等の衛生管理など、比較的手間のかかるものは、利用者本人ではなく家族が担っている場合が多かった。

「ペットを飼育する上で困っていること・心配なこと」として、飼育をめぐる近隣住民とのトラブル(1件)、吠える・咬むなどしつけに関すること(3件)、医療費・エサ代など経済的問題(3件)、外出時の不便(1件)、ペットの病気(1件)、ペットが死ぬことへの不安(3件)、ペットより先に自分が死ぬことへの不安(2件)などが挙げられた。しかし、同居家族がいる、あるいは別居家族と緊密な交流がある利用者らは、これらの事柄に対して、家族で協力をしながら対応していると答えた。また、ペットの健康に関する問題等は、かかりつけの獣医に相談をすとの回答が多かった。

2) 利用者に通ずる語り ペットを飼育する状況は様々であったが、利用者らは、ペットとの関わりをめぐる共通する語りを示した。「ペットから得られているものは何か」という質問に対して、利用者らは、『気持ちが通じ合う』(「自然と頭をなでたりして。コミュニケ

ーションっていうの? (Aさん)」、「そうね。私のことはだいたいわかっている(Bさん)」、「(自分の気持ちが)通じますね(Gさん)」、「『かわいい・楽しい・癒される』(「しぐさがかわいいから面白い(Aさん)」、「みんな楽しい。本当(Fさん)」、「いると癒されるので、ちょっとでも元気でいてほしい(Fさん)」、「『安心する』(「夜でも、猫がいると安心して寝られるわ(Bさん)」)などと語った。

また、「自分にとってのペットの位置づけ」についての質問に、利用者らは、『家族(の一員)』あるいは『子ども』と表現した。「一緒に生きていくのが当たり前になっている(Cさん)」と語る利用者もあった。

このように、利用者らは、それぞれの状況にかかわらず、ペットとの生活を楽しみ、享受する語りを示した。

3) 利用者それぞれに固有の語り 聞き取りの中で、利用者らは、ペット飼育に直接関係することだけでなく、それぞれの人生にまつわる様々な語りを示した。特に、現在の生活に何らかの困難があると見られる利用者は、自身の人生・生活とペットの存在とを複雑に関連づけて語ることがあった。ここでは、特徴的な事例として、3者の語りを挙げる。なお、会話例の通し番号として、引用した語りの文末に、利用者の仮名と数字を組み合わせた記号(例えば、C-1)を記した。

a. Cさんの語り Cさんは、若くして難病を患い、そのことに深く悩まされてきた。その中で、偶然、現在飼っている猫を拾い、その病気を治す経験をした。以下は、Cさんにとっての猫の位置づけに関する語りの一部である。

【筆者】じゃあ、ミーちゃんがそばにいないと寂しいですね?

【C】そう。今いなくなるとどれくらい寂しいかって。もう、昔の私に戻ってしまいそうで。(中略)

夜中、朝方とかに目が覚めると、すごく辛くなることあるの。ふつうの人だったら、さあ今日もがんばろう、という感じになるのだろうけど。ああまた辛い一日が始まるか思ったりして。

そんな時、猫がいると、ふっと病気のことを忘れられるの。

いつも(病気のことが)頭から離れなくて。こう、出口のないハコみたいなどころに入れられて、天井がぐーって下がってくる感じ。それを、猫が良くしてくれる。(C-1)

また、かかりつけの獣医師について尋ねた際、Cさんは次のように語った。

【C】他の先生では、ミーの病気が分からなかったの。K先生で3軒目だった。もうほんとにね、手で触れただけで「ああ、これは腸重積ですね」って。だからね、絶対の信頼を置いてるの。

【筆者】そうですか。

【C】私、自分の病気がなんなのか分かるまでに10年さまよったのに。(C-2)

加えて、猫との出会いが自分にとってどのような意味があったのか、次のような語りを示した。

【C】私がミーのことを話す時は変わるそうですよ。(C-3)

【C】私は(病気になってから)親しい人とも会いたくなかった。(今のようになったのは)ミーちゃんのおかげ。(C-4)

このように、Cさんは、ペットの猫に関する内容と、自身の病いに関するものが、複雑に関連づけられた語りを示した。特に、「猫がいるから、今の自分になれた」「もし、猫がいなくなったら、昔の自分に戻ってしまいそう」など、猫の存在と、今の自分のあり方との関係が、密接に関連づけられて語られた。

b. Dさんの語り Dさんは、長年にわたって多くの動物の飼育に関わっており、現在も、7頭近い猫の世話をしている。また、高齢の姉と2人で生活をしている。以下は、Dさんと猫との生活についての語りの一部である。

【D】私の生活は猫に明けて猫に暮れて。猫に年金をつぎ込んで(笑)(D-1)

【D】5時半に起きて猫の世話をしているの。もう、猫が主体。猫が満足してくれればそれで良い。猫のために生きていようなものよ。(D-2)

また、猫の世話について尋ねている際、度々、以下のような語りを示した。

【D】これ(今飼っている猫たち)の葬式をするまで死ねない、と思ってるの。そのおかげで、多少節制するようになった。もし(自分が)死んだら、(猫たちが)路頭に迷うでしょ？(D-3)

【D】私しかいないから、(世話をする人の)代わりがない。相手が人間なら国があるけれど……。獣医に頼んで、(私が)死んだら(猫たちを)安楽死とかできないかと考えている。引き取ってもらえる当てもないし。(D-4)

【D】近所に猫好きの奥さんがいて時々話すんだけど、(猫の世話を、誰か他の人に)引き受けてもらうのは不可能でしょう。(自分が死んだら、あの世に猫たちを)連れて行くしかないかなあ、って思ってるの。(D-5)

このように、Dさんは、猫が自身の生活の中心になっていることを熱心に語った。また、もし、自分に万が一のことがあったら、猫を安楽死するしかないと考えていることを繰り返し述べた。

c. Bさんの語り Bさんは、独居で猫1頭を飼育している。Bさんは、自身の病気に加えて、様々な事情で、地域内でやや孤立して生活をしているとのことだった。筆者らは、Bさんと概ね和やかに聞き取りを行ったが、猫の飼育をめぐるトラブルや不安について尋ねた際、以下のようなやりとりになった。

【筆者】先ほど、大家さんの奥様からちょっと何か言われてる、という話をされてましたけど、ご近所から何か、というのはそれくらいですか？

【B】うーん……。もうあんまり言わんけどねえ。私がいぶ言ったから。

【筆者】そうですか……。 (中略) ペットと一緒に生活をするって、楽しいことも多いけれど、いろいろ心配なこともあるって、他の人が調査というか、調べてわかったりすることがあるんですね。例えば、こんなことを言うのは不謹慎なんですけど、もしご自分に何かあったら、ペットのことをどうしようかと悩まれたりとか。

【B】……。そこまでの不安は、感じんねえ。

【筆者】その、心配事があるとして、どなたかに相談をすることはありますか？例えば、獣医さんに聞いてみるとか、(地域包括支援)センターの方に相談してみるとか……。

【B】……。今のところ、誰にも相談してないねえ。誰かに相談することもないね。(B-1)

Bさんは、この会話の直前まで、飼っている猫との生活の楽しさについて生き活きと語っていた。しかし、飼

育をめぐるトラブル・不安について少し踏み込んだ質問を投げかけると、このように、語りが途絶え、急に沈黙が多くなった。筆者はこれ以上不安やトラブルについての質問をするのをやめ、不快な気持ちにさせたことを詫びた上で、以前飼育していたペットのことなど、当たり障りのない事柄へと話題を変更した。

2. 職員への聞き取り結果

職員へのインタビュー結果を踏まえ、1) T地区利用者のペット飼育の現状、2) 利用者・職員にとってのペット飼育の位置づけ、3) 利用者のペット飼育をめぐるトラブルとその対応、の3点を整理した。

1) T地区利用者のペット飼育の現状 聞き取り時点でのT地区の利用者のうち、217名中29名(包括利用者:84名中9名/居宅利用者:133名中20名)がペットを飼育していた。うち、独居世帯は包括利用者2名であり、ほとんどの飼育者に同居家族があることが示された。また、飼育しているペットの品種としては、犬・猫・鳥が多かった。

2) 利用者・職員にとってのペット飼育の位置づけ 利用者にとっての動物飼育のメリットとして、「精神的な支え・話し相手」(4件)、「役割・日課・規則正しい生活の提供」(1件)、「親子関係の円滑化」(1件)などが得られるとの指摘がなされた。

一方、デメリットとして、ペットの死への不安(2件)、ペット飼育による健康問題(呼吸器疾患への懸念:1件、死別後の認知症の進行:1件、衛生管理の不備による不衛生な環境:1件)、ペットのエサ代等の経済的問題(1件)などが懸念された。また、「猫を飼っているから施設には行かない」と訴える利用者があることも指摘された。この他、動物が得意ではない職員にとって、訪問の際に利用者の傍らにペットがいることで、心理的なストレスが発生するとの意見も寄せられた。

こうしたメリット・デメリットを踏まえ、職員らは、利用者にとってのペット飼育を、「面接の際の話題」「生活習慣を整えるきっかけ」「円満な関係作りの糸口」等と位置づけていた。また、特にペットとの情緒的結びつきが強いと考えられる利用者は、面接の際のペット関連の話題内容から、その心の動きが推し量れるとの意見もあった。

3) 利用者のペット飼育をめぐるトラブルとその対応 利用者のペット飼育について、他住民からの苦情が寄せられている事例が紹介された。また、3名の職員から、過去に起きた困難事例(認知症高齢者の多頭飼育1件)を聴き取ることができた。一方、聞いたことがない・相

談を受けたことがないと答えた職員もあった。

こうした動物飼育のトラブルについては、基本的には、家族、民生委員・区長などの地域住民、ケースワーカー・医師等の専門職、行政等と相談をしながら進めるとの回答が得られた。しかし、問題を協議する相手として、愛護団体・獣医師など、動物関係の組織や専門家を挙げた職員はいなかった。

考察

本調査の結果、地域の福祉サービスを利用する在宅高齢者、及び、担当する福祉職員から、利用者のペット飼育をめぐる様々な語りを得ることができた。ここでは、ペット飼育をめぐる利用者の語りの特徴、及び、要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題について、考察を行う。

1. ペット飼育をめぐる利用者の語り

1) 共通する語り: ペット飼育をめぐる「モデル・ストーリー」 聞き取りの中で利用者らは、『気持ちを通じ合う』『かわいい・楽しい・癒される』『安心する』など、ペットへの愛着や情緒的結びつきを語った。また、7名全ての利用者が、自分にとってのペットの位置づけを、『家族(の一員)』あるいは『子ども』としていた。

7名の利用者に共通して見られたこのような語りは、ペットと飼育者との関係をめぐって、一般的にもしばしば語られる、ごくありふれたものであると言える(例えば、山田 2004)。ペットを家族と見なし、情緒的結びつきを示すような語りは、現代のペット飼育者コミュニティの中で流布している、飼育者とペットとの関係を示す典型的な「モデル・ストーリー」(桜井 2002)の1つであると考えられる。

モデル・ストーリーは、あるコミュニティ内で特権的な地位を占める語りであるが、人々は単にその枠にはめられて語るだけではない。むしろ、モデル・ストーリーは、定式化されたイデオロムとして参照され、人びとの語りにおいて再構成されて用いられることになる(桜井 2002: 36, 255-256)。今回の調査結果で得られた、ごくありふれた語りは、ペット飼育をめぐるモデル・ストーリーをもとに、利用者らがそれぞれのペットとの関係を表現したものであると言えるだろう。

2) 固有の語り: ライフストーリーにおける「仮定法の語り」と「沈黙」

a. ライフストーリーの一部としてのペットをめぐる語り 今回の調査は、利用者とペットとの関係について

の聞き取りを趣旨としていたが、そのような場において、利用者らはしばしば、自身や家族のこれまでの生活、老い・病い・死に対する不安など、人生に関する語り（ライフストーリー）の一端を語った。特に「人生における危機的な境界線上」（南 1995）にあると見られる利用者ほど、自身の人生とペットとを複雑に関連づけた語りを示したことは重要であると考えられる。ここではまず、DさんとCさんの語りを対比させながら、その特徴を整理してみよう。

Dさんは、自身の生活が猫の世話に明け暮れていることを、繰り返し、しかし楽しそうに語った（会話例：D-1, D-2）。Dさんと猫とは、「世話をする側-される側」という関係で語られ、あくまでもDさんの立場からストーリーが語られた。しかし、こうした語りは、現在のDさんの生活・人生に関する語りの一部であると言える。

一方、Cさんの語りでは、猫の存在が、自身の生活、特に病いに悩む自身の人生と密接に関わるものとして示されていた。（C-1）では猫がいなくなった場合の寂しさについて、（C-2）ではかかりつけの獣医師についての質問を投げかけたのだが、いずれも、Cさん自身の病いの語りとなっていた。これらの例に見られるように、Cさんの語りでは、「猫についての語り」と「Cさんについての語り」が頻繁に入れ替わり、複雑に関連づけられたものとして示された。

Dさん・Cさんの事例は、利用者らにとってのペットとの関係が、単なる愛着や情緒の結びつきといった、ペット飼育をめぐるモデル・ストーリーに回収され得ないものを含んでいることを示唆している。今回の調査結果では、ペットをめぐる語りは、利用者らそれぞれのライフストーリーと複雑に関わるものとして示された。

b. 「仮定法の語り」と「沈黙」 次に、インタビュー結果に見られた「語りの様式」（桜井, 2002）について、「仮定法の語り」と「沈黙」に着目し、考察を進める。語りにおける仮定法は、「ここにはない世界」、想定世界、可能世界を作り出す働きを持つとされる（やまだ 2007: 64）。やまだ（2007）は、喪失経験をめぐる語りの分析の中で、語り手が、仮定法を用いながら死者と自己との物語を密接に関連づけていると論じている。仮定法の語りには、「ここにはない世界」を想定し、自己と他者の物語を接続させる働きがあると考えられる。

一方、インタビューにおける「沈黙」は、自己物語の「語りえなさ」のあらわれであるという見方がある（例えば、浅野 2001）。沈黙は、語りの中のあいまいさ・ためらい・矛盾・非一貫性といった不確定要素、あるいは

物語世界のプロットから逸脱するようなエピソードの出現によってもたらされる（桜井 2002: 274）。つまり、語りの中でライフストーリーが破綻を来すような場面において、沈黙があらわれると言える。

今回の調査において「仮定法の語り」がしばしば見られたのは、Cさん・Dさんであった。Cさんは、病いを得るという苦悩の経験の後、今のような自分に変わることができたのは猫のおかげであると繰り返し語った（会話例：C-3, C-4）。そして、もし猫がいなくなってしまうと、「昔の自分に戻ってしまう」（C-1）と強調した。このように、Cさんの語りでは、「Cさんについての語り」と「猫についての語り」が強固に接続され、病いとともに生きる「現在のCさんのライフストーリー」の再構築が行われていることが示されていた。このことは逆に、猫の不在（という想定世界）が、即ち、「現在のCさん」をめぐる自己物語の崩壊を意味することも示唆していた。

Dさんの語りでは、自身の老い・死によって、残された猫たちの生活が脅かされることが強調された。そして、「もし自分に万が一のことがあったら、猫たちも連れて行くしかない」（会話例：D-3, D-4, D-5）と繰り返し語った。Dさんの場合も、Cさんとは異なるかたちで、自身と猫の物語が複雑に結びつけられており、Dさんの不測の事態（という想定世界）は、そのまま、猫たちの生の終焉を意味するものとして語られた。Dさんの語りは、Cさんと比較して、過去の経験よりは「今の日々の生活」が中心となるものであったが、やはり、ペットとの関係がライフストーリー再構築の中核となっていたと考えられる。

これらに対して、「沈黙」が特徴的であったのは、Bさんの語りであった。それまで和やかに猫との生活を語ってきたBさんが、ペット飼育をめぐるトラブルについての質問を投げかけたとき、急に沈黙することが増えるようになった（会話例：B-1）。この沈黙は、Bさんが直面しているトラブルに関する語りが、それまでの「猫との楽しい生活」という語りとは矛盾し、ストーリーが破綻してしまうために生じたと考えられる。実際に直面するトラブルが困難だけでなく、「猫との生活」を中心とするライフストーリーを語るができなくなってしまうのが、Bさんにとって辛いことであると、筆者には見受けられた。

このように、利用者らのペット飼育をめぐる語りは、単にペット飼育をめぐるモデル・ストーリーに当てはまるものだけでなく、利用者らそれぞれのライフストーリーの再構築において、重要な役割を果たしていることが示唆された。特に、利用者との関係は、「仮定

法の語り」「沈黙」という様式を伴って語りの中に現れ、両者の物語が不可分なものとして示された。

2. 高齢者のペット飼育をめぐる課題と展望

上述したように、ペットとの関係が、利用者のライフストーリーの再構築に寄与することが示された一方、安定した関係を維持するためには、様々な条件・課題があることも示唆された。

利用者側の条件として、まず、自身の健康や経済状況は、ペット飼育の継続において、現実的には大きな制約になりうるということが示された。また、同居あるいは近隣に住む家族の存在が、飼育にかかる様々な負担を軽減することも、聞き取りの結果から示唆された。このことは、高齢者のペット飼育についての先行研究（安藤・古谷野・児玉ら 1997）の知見と符合している。

さらに、援助者の立場からは、利用者のペット飼育が何らかのトラブルやデメリットを引き起こした場合、福祉従事者の立場だけから対応することが困難であるとの意見が、職員への聞き取りの中で寄せられた。動物飼育をめぐるトラブル対処は、福祉業務の中では、未だ一般的なものとして位置づけられていない。加藤（2009）の事例でも示されたように、要支援・要介護高齢者のペット飼育に関わる問題については、獣医療関係者や愛護団体など、従来は地域福祉の社会資源として位置づけられてこなかったような専門家・個人を含め、様々な立場の人々による連携・サポートが必要となると言える。

以上のように、要支援・要介護高齢者がペットを飼育するにあたっては、様々な課題が考えられる。しかし、「当事者の語り」という視点からは、ペット飼育に関して次のような意義も示唆される。

第1に、ペット飼育をめぐる語りや、聞き手と語り手との間で、和やかな関係・場を形成しやすいという点である。職員への聞き取りでは、利用者のペット飼育を「面接時の話題」や「関係作りの糸口」として活用しているとの意見が寄せられた。ペット飼育をめぐる語りは、そのモデル・ストーリーを端緒に、聞き手と語り手との間の関係作りに寄与することが示唆される。それゆえ、筆者らのような、福祉専門職でもない初対面の人間でさえ、利用者との間で、穏やかな語りの場を作ることができたと考えられる。

第2に、そしてより重要な点として、ペットをめぐる語りや、利用者のライフストーリーに密接に関連している場合もあることが挙げられる。本研究においても、ペットをめぐる語りや、利用者のライフストーリーの再構築において、独特な語りの様式とともにあらわれている

事例が見られた。ペットをめぐる語りは、飼育している利用者自身の「いまだ語られていない物語」に接近をする手がかりになると言えるだろう。

要支援・要介護高齢者にとってペットは、単に飼育を通じた心身への直接的影響だけでなく、ペット飼育をその一部とする自身の人生の意味づけの過程に寄与する可能性が示唆された。今後も、丹念な語りの聴き取りを通して、高齢者にとってのペット飼育の意義を検討する必要があると言えるだろう。

謝辞

本調査にご協力頂いた利用者の方々、T地区地域包括支援センター・居宅介護支援事業所職員の皆様、九州保健福祉大学社会福祉学部・渡邊一平教授、同東洋介護福祉学科・中野真里子さんに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 安藤孝敏・古谷野亘・児玉好信・浅川達人（1997）「地域老人におけるペット所有状況とペットとの交流」『老年社会科学』19(1), 69-75.
- 安藤孝敏（2003）「高齢者とペットとの関係」桜井富士朗・長田久雄 編著『人と動物の関係』の学び方——ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう』インターズー, 193-201.
- （2008）「ペットとの情緒的交流が高齢者の精神的健康に及ぼす影響」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ社会科学』10, 1-10.
- 荒井浩道（2008）「繋がっていない利用者への支援——ソーシャルワークにおけるナラティブ・アプローチの可能性」崎山治男・伊藤智樹・佐藤 恵・三井さよ 編著『＜支援＞の社会学——現場に向き合う思考』青弓社, 114-137.
- 浅野智彦（2001）『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.
- Baun, M. and Johnson, R. and McCabe, B. (2006) Human-Animal Interaction and Successful Aging (=2007, 「人と動物の関わりとサクセスフル・エイジング」 Fine, A. H. ed.・太田光明・大谷伸代 監修『アニマル・アシステッド・セラピー第2版——実践のための理論的基盤とガイドライン』インターズー, 191-201.)
- 福田公教（2007）「コミュニティソーシャルワーク」

- 上野谷加代子・松端克文・山縣文治 編 『よくわかる地域福祉第3版』 ミネルヴァ書房, 120-121.
- Hart, L. A. (1995). The Role of Pets in Enhancing Human Well-being: Effects for Older people (=1997, 「人の健康に果たすペットの役割——高齢者に対する影響」 Robinson, I. ed.・山崎恵子 訳 『人と動物の関係学』 インターズー, 23-39.
- 加藤謙介 (2009) 「コミュニティにおける社会問題の構築過程——「地域福祉」と「猫トラブル」の接続に関する事例」『日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集』 366-367.
- 木原活信 (2010) 「社会福祉領域におけるナラティブ論」 野口裕二 編 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房, 153-175.
- Levinson, B. M. (1969) "Pets and Old Age," *Mental Hygiene*, 53, 364-368.
- 南 博文 (1995) 「人生移行のモデル——人間発達のドラマをどう見るか」 南 博文・やまだようこ 編 『老いることの意味——中年・老年期』 金子書房, 1-40.
- 宮城 孝 (2008) 「地域を基盤としたソーシャルワーク実践の方法と内容」 平野隆之・宮城 孝・山口稔 編 『コミュニティとソーシャルワーク』 有斐閣, 147-168.
- 内閣府 編 (2010) 『高齢社会白書(平成22年版)』 佐伯印刷.
- 野口裕二 (2010a) 「ナラティブ・アプローチの展開」 野口裕二 編 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房, 1-25.
- 野口裕二 (2010b) 「はじめに」 野口裕二 編 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房, i-iii.
- 野口裕二 (2010c) 「ナラティブ・アプローチの展望」 野口裕二 編 『ナラティブ・アプローチ』 勁草書房, 257-279.
- 桜井 厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』 せりか書房.
- 柴内裕子 (1999) 「高齢者と動物の絆は21世紀の最重要課題——ヒューマン-アニマル・ボンドの理念から」 『Relatio』 4, 47-49.
- 鶴若麻理・岡安大仁 (2003) 「語り(ナラティブ)からみる高齢期の生きがいの諸相」 『生命倫理』 13(1), 150-157.
- 山口千津子 (1999) 「ペット飼育の問題点と今後の課題——高齢者への聞き取り調査からの検証」 『Relatio』 4, 34-35.
- 山田昌弘 (2004) 『家族ペット——やすらぐ相手は、あなただけ』 サンマーク出版.
- やまだようこ (2006) 「質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己」 『心理学評論』 49(3), 436-463.
- (2007) 『喪失の語り——生成のライフストーリー』 新曜社.